

古文「き」と「けり」の違い 100題ドリル

対象：高校生・大学受験生 | 著作権：誰でも古典塾 (kotennosensei.com) 無断転載禁止

はじめに

過去の助動詞「き」「けり」は、どちらも「～た」と訳せますが、**意味（ニュアンス）の使い分け**が入試で問われます。傍線部を次の**3タイプ（ア・イ・ウ）**に分類しましょう。

記号	語	意味	出やすい場所・目印
ア	き	直接過去（自分が体験した「た」）	体験談・日記。「～し時」「見しかば」など自分の見聞
イ	けり	伝聞・過去（人づて／物語の語り「～た」）	地の文・物語の語り出し「昔、～ありけり」
ウ	けり	詠嘆（～だなあ、という気づき・感動）	和歌の中／会話文の「今気づいた」けり

鉄則 - 「き」（し・しかを含む）を見たら → 直接過去（ア）。話し手が自分で体験したこと。 - 「けり」（ける・けれを含む）を見たら → まず〈和歌・会話か／地の文か〉を見る。 - 和歌の中・会話文の気づき → 詠嘆（ウ）。 - 地の文の語り → 伝聞・過去（イ）。

🎯 解き方のコツ

- 語の形で「き」か「けり」かを確定。き系＝き・し（連体）・しか（已然）／けり系＝けり・ける（連体）・けれ（已然）。
- き系なら即「ア（直接過去）」。「（私が）～し」と自分の体験。
- けり系は場所で判断。和歌の中や会話の感動なら「ウ（詠嘆）」＝「～だなあ」。物語の地の文なら「イ（伝聞・過去）」＝「～た（そうだ）」。
- 和歌の「けり」を機械的に「～た」と訳さない。詠嘆「～だなあ」を疑う。

採点表

部	問題	目標
第1部 基礎	Q1～Q20	18／20
第2部 標準	Q21～Q50	24／30
第3部 応用	Q51～Q80	22／30
第4部 入試	Q81～Q100	14／20

【第1部】基礎（Q1～Q20）

Q1. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 昔、男ありけり。

Q2. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

> 京より下りし時に、思ふこと多かり。

Q3. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> （歌）年の内に春は来にけり。

Q4. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 今は昔、竹取の翁といふものありけり。

Q5. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

> 昨日、池の月をなむ見し。

Q6. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 「あはれ、かかる事も**ありけり**」と独りごつ。

Q7. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ 我、幼くてこの寺に**詣**でき。

Q8. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ ある所に、年老いたる女**住みけり**。

Q9. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

▶ (歌) 人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香に**にほひける**。

Q10. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ 我、昔この道をしばしば**通りき**。

Q11. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 帝、長く世を治めた**まひけり**。

Q12. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ なほたづねて見れば、はや**なかりけり**。

Q13. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ 父に従ひて、幼くて筑紫に下りき。

Q14. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

▶ この事、世に長く語り伝へける。

Q15. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 「はや、年も暮れにけり」と、人々言ふ。

Q16. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ もとより友とする人、一人二人して行きけり。

Q17. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ いとうれしと、その折思ひき。

Q18. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

▶ 家に帰りて見しかば、文ありき。

Q19. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 「さは、汝なりけり」と、驚きて言ふ。

Q20. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

> いとあやしき翁、竹の中に**ありける**。

【第2部】標準 (Q21～Q50)

解答：

Q21. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

> われ、その夜の**ことをよくおぼえき**。

Q22. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 昔、惟喬の親王と申す親王**おはしましけり**。

Q23. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> (歌) 見わたせば花も紅葉もなかり**けり** 浦の苫屋の秋の夕暮れ

Q24. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

> **ありし**日の御面影、今も忘れず。

Q25. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> その国に、いやしき男なむ**住みける**。

Q26. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 「年へに**けるかな**」と、しみじみ言ふ。

Q27. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ 旅の空にて、月をぞ眺めし。

Q28. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 昔、ある聖、深き山に籠りけり。

Q29. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ (歌) 忍ぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで

Q30. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

▶ 都にて聞きしかど、げにと思はざりき。

Q31. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 大納言、おほきにかしこまりけり。(物語の地の文)

Q32. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

▶ (歌) 山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

Q33. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ われ、若かりし時、武芸を好みき。

Q34. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 今は昔、丹波に出雲といふ所ありけり。

Q35. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 「あはれ、いと寒くなり^にけり」と、つぶやく。

Q36. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

▶ 去年見^し人に、今年もまた逢ふ。

Q37. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

▶ この男、京にのぼり^{ける}。(物語の地の文)

Q38. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 「あはれ、夜も明け^にけり」とて、急ぎ立つ。

Q39. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ その音を、たしかにこの耳に聞き^き。

Q40. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 男、女を盗みて、芥川といふ川を率ていき^{けり}。

Q41. 次の傍線部「けれ」は、ア～ウのどれか。

▶ 「げに、世こそ変はりにけれ」と、つぶやく。

Q42. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

▶ われ、いにしへ宮仕への身にありしかば、内裏の様もよく知る。

Q43. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 帝、その者を召して、官（つかさ）を賜びけり。（地の文）

Q44. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 「げに、世は夢のごとくありけり」と嘆く。

Q45. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ その夜、われは一睡もせざりき。

Q46. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

▶ 昔、世になく心高き女ありける。

Q47. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 「人の情けの、げにありがたかりけり」と、涙ぐむ。

Q48. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

▶ かの人に逢ひ**しか**ど、もの言はで別れにき。

Q49. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ その後、男は都へも帰らで、その国にとどまり**けり**。(地の文)

Q50. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 「あな、めでた。かかる人も世に**ありけり**」と、めで惑ふ。

【第3部】 応用 (Q51～Q80)

解答：

Q51. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ 我、その合戦の場**にありき**。げにおそろし。

Q52. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 昔、東の方に住む人、武蔵野に分け入り**けり**。

Q53. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

▶ (歌) あひ見ての後の心にくらぶれば昔はものを思はざり**ける**。

Q54. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

▶ 老いては、若く**ありし**昔のみ恋しく覚ゆ。

Q55. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ この僧、夜ごとに堂にこもりて、ひとり経をぞ読みける。(地の文)

Q56. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 「今ぞ知る、苦しきものは人の世なりけり」とぞ歌ひける。

Q57. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

▶ 幼かりし折、祖母にこの物語を語られき。

Q58. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

▶ 昔、ある男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえけり。

Q59. 次の傍線部「けれ」は、ア～ウのどれか。

▶ 「眺むれば、花こそ散りにけれ」と、をしむ。

Q60. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

▶ われ、いと幼くして、母におくれしかば、顔をだに知らず。

Q61. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

▶ その所に、いと大きな川のありけるを、人々渡りわづらふ。

Q62. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 「あはれ、はかなき世にも**経にけり**」と涙ぐむ。

Q63. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

> その絵を、われ確かに昔**見き**。違ふべくもなし。

Q64. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> いと久しく時**経て**後、この事あらはれ**けり**。(地の文)

Q65. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

> 「さても、都は恋しきものなり**けり**」と、旅人嘆く。

Q66. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

> われ、その人と契り**し**ことを、今も忘れず。

Q67. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> その国の守、おほやけの物を盗みて、ひそかに**たくはへけり**。(地の文)

Q68. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 「げに、命あるものは皆ほろぶるものなり**けり**」と悟る。

Q69. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

> 我ら二人して、その山を越え**き**。いと苦しかり**き**。

Q70. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

> 昔、をのこども集ひて、花見にとて出で立ち**ける**。(地の文)

Q71. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 「おのが心さへ、いつしか変はりに**けり**」と、思ひ知る。

Q72. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

> その夜、雨いたう降り**しか**ば、え出でずなりに**き**。

Q73. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 昔、男、初冠して、奈良の京、春日の里に狩りに往に**けり**。

Q74. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 「あな悲し。たのみし人もかかる心**ありけり**」と泣く。

Q75. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

> われ、その使ひに立ちて、みづから文を奉り**き**。

Q76. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

> この女、容貌よくて、心ばへもめでたかりける。(地の文)

Q77. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 「今年の紅葉は、ことに深かりけり」と、めづ。

Q78. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

> 我が植ゑし松も、いつしか大きになりけり。

Q79. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> その後、この寺は次第に荒れて、人も住まずなりけり。(地の文)

Q80. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 「年ごろ思ひつること、今日こそかなひけれ」と、よろこぶ。

【第4部】入試 (Q81～Q100)

解答：

Q81. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 昔、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけり。

Q82. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

> 「これは、われ昔の都にて見し人なり」と、男言ふ。

Q83. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

> 「はるばる来つる旅も、思へば遠く来にけり」と、涙ぐむ。

Q84. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

> 「われ、その夜、確かにその声を聞きき」と、おのれの体験を語る。

Q85. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> その男、京にもものへ行きけるに、道にて見知らぬ僧に逢ひにけり。

Q86. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 文を開きて見れば、「我はすでに尼になりにけり」とぞ書きたる。

Q87. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

> われ、若くて宮仕へに出でしかば、世の有様をもおのづから見及びき。

Q88. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

> 男、女のもとに通ひけるを、親聞きつけて、いみじう制しける。

Q89. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 「逢ふも別るるも、皆この関にてありけり」と、感ず。

Q90. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

> われ、かの人と同じ船にて、はるかの島まで**渡りき**。

Q91. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 今は昔、ある下衆の家に、年経たる猫**住みけり**。

Q92. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 鏡を見て、「あな、われも老いに**けり**」と、おどろく。

Q93. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

> 「あはれ、いとほしと思ひ**し**人は、はや亡せに**けり**」と語る。

Q94. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

> その聖、年ごろ山にこもりて、世に出づることもなく**ありける**。

Q95. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 「人の命の惜しさも、げにあるものなり**けり**」と、あはれむ。

Q96. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

> 「この歌は、われ十のとし、はじめて**詠みき**」と、誇らかに言ふ。

Q97. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> かくて、年月を経て、男はつひにその国の守になり**にけり**。(地の文)

Q98. 次の傍線部「けれ」は、ア～ウのどれか。

> 「思ひきや、かかる山里に住まむとは。世は定めなきもの**こそありけれ**」と嘆く。

Q99. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

> われ、その軍（いくさ）に加はりて、矢の下をくぐり**しかど**、かすり傷だに負はざりき。

Q100. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

> 昔、男あり**けり**。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき国求めにとて**行きけり**。

採点・振り返り

部	点数
第1部 基礎 (Q1～Q20)	／20
第2部 標準 (Q21～Q50)	／30
第3部 応用 (Q51～Q80)	／30
第4部 入試 (Q81～Q100)	／20
合計	／100

復習のポイント - 「き（し・しか）」は直接過去（ア）。「（私が）～した」という自分の体験。連体形「し」、已然形「しか」の形に注意。 - 「けり（ける・けれ）」は2つの顔。地の文の語りなら伝聞・過去（イ）、和歌の中・会話の気づきなら詠嘆（ウ）。 - いちばんの分かれ目は「どこにある

『けり』か」。和歌や「あはれ」「今ぞ知る」などの感動の文脈は詠嘆を強く疑う。 - 過去の助動詞は「けれ」「し」「しか」の識別とあわせて整理すると、得点が安定する。

解答：

© 個別指導塾フィット / 中本裕太 <https://kotenosenensei.com>